

大分における競い合いの文化と統合の文化

辻野 功、檜本 讓 司

1. 小藩分立から生まれたまとまりの悪さ

大友家21代の^の大友宗麟(1530 - 1587)は、九州9ヵ国中、豊前・豊後・肥前・肥後・筑前・筑後の6ヵ国の守護であった。彼の支配下になかったのは薩摩・大隅・日向、今の鹿児島県・宮崎県の3ヵ国だけだった。九州全体を統括する九州探題にも任ぜられた。宗麟は九州の覇者であった。16世紀ヨーロッパでは、豊後九州とさえ見られていた。

しかし南から攻め上る薩摩の島津に抗し切れず、豊臣秀吉の九州平定によって救われ、家督を継いでいた大友義統は、豊後一国のみを安堵された。豊前六郡には黒田孝高が入部した。豊前六郡とは京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐であるが、このうち下毛・宇佐郡が後の大分県域である。

豊後一国を安堵された大友義統も、文禄2(1593)年の朝鮮出兵のさい最前線の平城で明軍の猛攻を受けた小西行長の救援要請に応えなかった咎が問われ、改易された。召し上げた豊後に、播磨国三木から直入郡岡に転封させた中川秀成を唯一の例外に、秀吉は直系の家臣たちを大名に取り立てて分封し、半ばを太閤蔵入地(直轄地)とした。

ここに大分県域の小藩分立が始まり、廃藩置県まで続いた。廃藩置県直前の状態でいえば、奥平氏の^の中津藩(豊前 10万石)、松平(能見)氏の杵築藩(3.2万石)、木下氏の日出藩(2.5万石)、松平氏(大給)の府内藩(2.2万石)、稲葉氏の臼杵藩(5万石)、毛利氏の佐伯藩(2万石)、中川氏の岡藩(6.6万石)、久留島氏の森藩(1.25万石)、更に島原藩の飛地(2万7600石)、熊本藩の飛地(2万石)、延岡藩の飛地(2万石)、旗本の時枝氏領(5千石)、旗本の立石氏領(5千石)、宇佐神宮領(1千石)、天領(10.4万石)の15の領地に分かれていた。隣の熊本県は熊本藩(54万石)と人吉藩(2.2万石)の2藩から形成されたが、大分県全域の石高は熊本藩1藩よりやや少なかった。それが8藩7領に分かれていたのである。

幕藩体制時代、藩が違うということは、現在であれば国が違うということである。熊本藩領大分郡谷村(由布市挾間町谷地区)の惣庄屋工藤三助(1661 - 1758)は不毛の地に水をもたらして農家の暮らしを良くしたいと考え、府内藩領野畑村(由布市庄内町)熊群山南麓を水源に「大竜井路」を元禄12(1699)年に完成させた。この時は他藩とはいえ妻が府内藩出身であったので、比較的自由に府内藩に入って水源調査が出来た。ところが同じ熊本藩領の野津原も水のない土地であった。その水源探しには天領と岡藩領を調査せねばならなかった。公然とは行けない。そこで^の行商人に扮して、天秤棒に測量目盛を刻み、それを使って測量して、岡藩領直入郡湯原組鑰小野村湯原川畔(芹川)に水源を見つけた。水源が見つかったも、他藩から水を引く工事など藩庁普請奉行役所が許すはずがない。三助は奉行所におよそ1ヵ月通い続けて、奉行所をその気にさせた。他藩と外交交渉せねばならない工事など不可能だと、奉行所は考えていたのである。それを三助の情熱が突破し、宝永4(1707)年に鑰小野井路を完成した。三助が開いた井路は21世紀

のいまも、彼の郷里を潤している。

大分県域はかくの如く小藩分立だった。小藩分立は、とてつもないマイナスを齎した。その最大のものは、まとまりの悪さである。大分出身の故筑紫哲也氏が、「まとまりの悪さは『天下一品』⁽¹⁾」とまで自嘲的にいったほどである。そのまとまりの悪さを逆手にとって競い合わせて成功したのが、平松守彦前知事が始めた一村一品運動であった。

2. 競い合いの文化としての一村一品運動

一村一品運動の提唱

1974(昭和49)年6月の国土庁発足と同時に通産省から地方振興局審議官として同庁に赴任していた平松守彦氏は、当時の立木勝^{たきまさる}大分県知事から乞われ、郷里の友人連からの要請もあり、翌年7月に郷里の大分県副知事に就任した。副知事になった平松氏は、まず「それぞれの地域において地域自立を求めて活動する人たちとつき合おうと決めた⁽²⁾」が、一番感銘を受けたのが後述する大山の地域づくりであった。

1979(昭和54)年、立木知事の引退を受けて当選した平松知事は、11月26日の各町村長との「自治行政連絡懇談会」と12月4日の各市長との「自治行政連絡懇談会」で、一村一品運動を提唱した。それぞれの地域が地域の誇りになる産品を作り上げていこう、その産品は農産物でもよければ観光でも民謡でも良い、それぞれの地域の顔になるものを作り出し、貧しさから脱却すると共に、地域に誇りを取り戻そうと提唱したのである。そして知事の密かな狙いは、小藩分立の影響から協調性に欠ける県民性を逆手にとって、地域同士を特産品作りで競い合わせて活性化させようと思ったのである。

ところが翌日の新聞は懇談会のことは報じてくれたが、一村一品運動については一行も書いてくれなかった。県庁の幹部でさえ「いっそんいっぴんちゃ、ドゲな(どんな)字を書くんか⁽³⁾」とか「なんか今度ン知事はおもしろいこつ、ゆうちよるなあ⁽⁴⁾」ぐらいの反応であったという。

一村一品運動が県民に認識されるようになったのは、毎週日曜日に大分放送とテレビ大分の両テレビ局で放映している県の広報番組を市町村に無料で提供し、市町村自主企画の「ふるさと自慢番組」を制作させたことからであった。シリーズのタイトルは「創ろう！わがふるさと」であった。1980(昭和55)年1月6日の第1回放映の「ウメ、クリの里・大山町」から、直入町の「芹川ダムわかさぎ釣り」・「育てる漁業・米水津村」・「車エビと若者の島・姫島村」と続いた。テレビ放映は大きな反響があった。一巡すると、「もう一度やらせてくれ」との要望が出た。1982(昭和57)年6月から、「豊の国一村一品」シリーズとして2巡目がスタートした。2回目になると「ここだけは見て欲しい」と焦点を絞った番組になった。平松知事は「一村一品運動をやるにしても……それぞれの地域で競争意識を持たせる⁽⁵⁾」ことが肝心だと説いているが、このテレビ番組自体が、各市町村の競い合い精神を高めた。そして一村一品の創生も競い合うようになった。テレビの効果は、絶大であった。

一村一品運動のモデルとしての大山

平松知事が一村一品運動を提唱した際、モデルになった地域づくりがあった。それが日田郡の大山町(現日田市)であった。大山町は地図を見れば分かるように、高速道路がなかった時代には大分市から車で2時間半かかった山里である。田畑は標高が高く狭い。米どころの佐賀平野に比べ、大山ではせいぜい三分の一しかとれなかった。そんな客観的条件極悪の地に、「貧乏こそ、最大の悪。米を作っているかぎり、大山は貧乏から抜け出せない⁽⁶⁾」と考えるリーダーが現れた。矢幡治美氏であった。彼は1954(昭和29)年に農業協同組合長に就任し、1955-1971年に

は村長・町長も兼務した。

矢幡治美氏は「米一俵増産運動」を唱えている県に背を向け、1962（昭和37）年に米作から梅栗栽培への転換を提唱した。梅栗による収入こそ貧乏からの脱出路だと確信したのである。しかし農政部は「大山は独立国ではないぞ⁽⁷⁾」とクレームをつけてきたが、へこたれる矢幡氏ではなかった。その彼が大山の人々を激励するために、「梅栗植えてハワイに行こう」というキャッチフレーズを使い始めた。これは株式会社寿屋（現サントリー株式会社）が1961（昭和36）年からテレビで放映していたハワイ旅行が懸賞のCM「トリスを飲んでハワイへ行こう」の物まねであるが、それだけにインパクトがあった。因みに「トリスを飲んでハワイへ行こう」は、2年後に直木賞を取る山口瞳の作であった。山口瞳も既に芥川賞作家であった開高健も、寿屋宣伝部にコピーライター等として勤務していたのである。

大分に帰って1年目の1976（昭和51）年、平松副知事は「大山の若モン衆が東京帰りの副知事に会いたい」というので大山を訪れた時のことを、感動的に語っている⁽⁸⁾。

この夜肌で体験した大山の「梅栗植えてハワイに行こう」が、一村一品運動発想の原点になったといつて過言でない。平松副知事とこの夜を語り明かしたジュニアの矢幡欣治・現農協組合長は、梅栗にエノキダケを加えた。その後、山に挟まれた平地の少ない大山の地形を逆転の発想で活かし、現在では多品種を少量生産し、農協直営の農産物直販所「木の花ガルテン」（1990年7月8日開店）に出荷する農産物は700種に及ぶ。今や大山から貧乏は追放された。人口3,600人の町で、1,000万円以上の年収の農家は150世帯を越え、年収2,000万円の農家さえある。

店頭価格100円の場合、「木の花ガルテン」では農協手数料は20円で、農家の手取りは80円である。ところが一般の農協を通して卸市場経由によって小売店で販売してもらう場合は、農家の手取りは僅か20円にしかならない。まるで逆だから、高収入の農家が大山には続々誕生したのである。

梅栗植えた成果として大山の農民がハワイに初めて行ったのは、1967（昭和42）年のことであった。この時代には映画スターくらいしかハワイに行っていなかった。日本におけるヨーロッパ学のメッカの京都大学人文科学研究所西洋部の先生方でヨーロッパに行ったことがあるのは、御大の桑原武夫教授と梅棹忠夫先生だけだった。そこでヨーロッパ学術調査の名目で加藤秀俊・多田道太郎先生ら8名をヨーロッパに送り出したのが、同じ年の1967（昭和42）年6月であった。こんな時代から、大山の農民はハワイに行きだした。パスポートの所持率は現在では70%を越え、断トツ日本一である。

「木の花ガルテン」への出荷のさい値段は原則50円きざみで出荷者自身が決める。だから値段は、消費税込みで105円とか210円等になっている。お店は福岡・大分・別府市も含め8店舗あるが、どこに出荷するかも出荷者自身が決める。農産物は、出荷者が誰であるか分かるようになっている。出荷農産物を置いてある場所に、出荷者の写真を貼ってある場合もある。

後で述べるように、大分県は今や国内のみならずアジア・アフリカ諸国から見て、地域づくりのメッカである。「特定非営利活動法人 大分一村一品国際交流推進協会（平松守彦理事長）」の統計によると、2007年度海外から視察・研修に来た国・地域は46に上り、人数は1,476人であった。その殆どが一村一品運動のモデルの大山詣でをし、「木の花ガルテン」を見学する。

モデル産品としての椎茸

「地域の顔になるもの、地域の誇りになるもの、そして日本と世界に通用するものをつくろう」と一村一品運動が提唱されたが、大山の梅・栗以外に何かモデルになる産品があった方が県民に理解されやすい。大分には立派なモデルがあった。椎茸である。なにしろ当時で全国生産の4分の1を占め、1981（昭和56）年時点で過去29回開かれた全国乾椎茸品評会で通算21回も優勝を果

たしており、質量共に日本一、即ち世界一であったからである。

2008(平成20)年7月8日に全国乾椎茸品評会が開かれたが、団体優勝10年連続の42回目の優勝を飾った。個人の部でも農林水産大臣賞と林野庁長官賞に計18名が選ばれ、2位との差は年々開いている。生産量はもちろん全国一で、2007(平成19)年度は1,309トンで全国の37%を占め、大分の地位は質量共に揺るぎないものとなっている。

平松知事が「一村一品運動」を提唱した際、「一村二品」や「一村三品」でも良いし「二村一品」や「三村一品」でも良いといったが、椎茸は「大分全村一品」と言ってよい程、全県的に生産されている。

焼酎

産品としての一村一品運動最大のヒット商品は麦焼酎であった。かつて焼酎は、お酒を買えない貧乏人が酔うために飲むものであり、お酒を買える人からは「においがきつい」と悪評であった。焼酎に「においから香りへの革命」を起こしたのは、大分県日出町の二階堂酒造が1974(昭和49)年4月に「大分むぎ焼酎 二階堂」を発売した時である。「二階堂」は麴も含めて大麦100%の麦焼酎であった。「二階堂」に衝撃を受けた宇佐市の清酒メーカーの三和酒類は、1979(昭和54)年2月に麦焼酎「いいちこ」を発売した。この年4月に初当選した平松守彦知事が一村一品運動を提唱したのが11月であった。大分の麦焼酎は一村一品運動と共に売り上げを伸ばしていった。

後発の「いいちこ」は「二階堂」・「吉四六」を抜き、日本一の販売高となった。焼酎メーカーの2007年度の売上高ランキングは三和酒類が568億円で5年連続の日本一、二階堂酒造は6位の201億円である。この差は品質の差というより、情報発信力の差ではないだろうか。

三和酒類は広告制作をアートディレクター河北秀也氏に一任した。当初は三和酒類の広告宣伝費が限られていたため、河北氏は地下鉄の駅に張るポスターから始めた。売り上げが増え広告宣伝費を増額できるようになると、世界の美しい風景と共に楽しませてくれるテレビCMも始めた。河北秀也氏が今日の「いいちこ」、あるいは三和酒類を育て上げたと言って過言でない。西太一郎・三和酒類会長は、「この二十年間は、河北さんが提示する上質なブランドイメージに、品質を近づけるための努力の道程だったような気がします⁽⁹⁾」と正直に告白されているのである。

一村一品運動が始まる前の1975(昭和50)年には、大分産の焼酎の全国シェアはたったの1%だったから、信じがたい急成長である。大分麦焼酎は一村一品運動の「優等生」であり、西会長は「知事を退任された今でも、平松さんには足を向けて寝られませぬ⁽¹⁰⁾」と感謝している。

カボス

カボスはレモンやスダチやユズ等と同じ香酸柑橘であり、臼杵市と竹田市を中心に自家用に栽培されていた。山間地が多く米増産に対応するのが難しかった竹田市では、昭和30年代後半、米に代わる作物として販売用に栽培を始めた。これは竹田市城原の古庄孝三さんがたった1人で決断して、1961(昭和36)年にカボスを20アール植えたのが始まりであった。1970年代から始まった減反政策は、米の代替作物としてのカボスの栽培を促進させた。そしてカボスの枝を剪定して木の隅々まで日光が当るようにすれば、皮が薄く果汁と果肉が豊かなカボスが収穫できることが分かり、栽培方法も大きく改善された。

さらに輸入レモンにカビ防止剤として発がん性のポストハーベスト農薬が使われていることが分かり、食の安全性の観点から、輸入レモンの代替品としてカボスの需要が大きく拡大した。

2005(平成17)年度のカボスの収穫量は臼杵市が1,310トンで1位、竹田市が960トンで2位だが、3位の豊後高田市が810トンと続き、椎茸のように「全村一品」的に全県下で栽培されている。そして全国生産の95.4%を占めている。正しく大分は「カボス県」である。

大分のカボスは徳島のスダチに知名度で大きく遅れをとっていたが、いまや急速に追いつきつつある。古典落語に「目黒のさんま」があるが、東京では二つの「さんま祭り」が競い合っている。JR 目黒駅を挟んで目黒区主催の「目黒のさんま祭り」と品川区の「目黒のさんま祭り」である。目黒区側は区民祭りとして、さんまの水揚げ量 6 位の宮城県気仙沼市が 5,000 匹のさんまを提供する。一方、品川区側は目黒駅前商店街が主催し、同 2 位の岩手県宮古市が 6,000 匹のさんまを持ち込む。1998（平成 10）年から徳島のスダチが品川区側のさんま祭りに提供されるようになり、これに対抗して翌 1999（平成 11）年から大分産のカボスが目黒区側に提供されるようになった。これがきっかけで気仙沼との「さんまとカボスの交流」が始まった。

関あじ・関さば

北海道郡佐賀関町（現在は大分市）の「関あじ」・「関さば」は全国ブランドになった。大分は海の幸・山の幸に恵まれているが、大分市佐賀関の「関あじ」・「関さば」は抜群のブランド力を誇っている。

「関あじ」・「関さば」の販売戦略を立てたのは、日本文理大学の藤沢憲治助教授（当時、その後教授を経て現在大銀経済経営研究所参与）である。大分県漁政課から「関あじ・関さばの流通についての調査」を依頼された藤沢助教授は、「福岡博多をターゲットにブランド化の確立を図ってはどうか。福岡市民は魚が好きで、他地域に比べ活魚料理店が多く、また東京・大阪が本社の大会社の九州支社・九州支店があり、接待による『支店経済』需要が見込める。そして『支店』で知名度が上がれば、本社の東京・大阪にも、その効果が波及する⁽¹¹⁾」と提言した。その後は藤沢先生の示唆に従い、順調に売り上げを伸ばしていった。

ところが「関あじ」・「関さば」が有名になりだすと、1992（平成 4）年ごろから偽物が出だした。「関あじ」・「関さば」が揚がっていない時期に「関あじ」・「関さば」がどんどん売られていたのである。そこで佐賀関漁協は 1992（平成 4）年 10 月に漁協のマークを商標登録申請して、1996（平成 8）年 10 月に認可された。翌 1997（平成 9）年から「関あじ」・「関さば」の特約店の看板を制作して特約店制度を確立すると共に、注文分には 1 匹ずつ「関あじ」・「関さば」のタグシールを魚の尾ひれにつけた販売を開始した。当時は魚の商標登録など誰も考えなかった時代であるから、佐賀関漁協の先見性は素晴らしいものである。

豊後牛

いまブランドを確立しつつあるものに豊後牛がある。豊後牛の歴史は古く、1921（大正 10）年、東京で開催された全国畜産博覧会で大分の「千代山」という種雄牛が最優秀賞に輝き、「牛は豊後が日本一」という旗を掲げて銀座をパレードしたという記録が残っている。1967（昭和 42）年ごろから始まった飯田高原の農地開発に伴い飼育頭数が増加し、1970（昭和 45）年の全国共進会では天皇賞に輝いた。しかし「豊後牛」のブランドは、まだそれ程知られておらず、大分の牛は素牛として売られ、松坂牛になったり、神戸牛になったりしていた。

そこで「豊後牛」としてのブランドを売り込もうとして 1980（昭和 55）年 7 月から東京出荷を始め、その年の 12 月 5 日に平松知事は「豊後牛展示即売会」開催中の東京食肉市場のセリ台に立ち、仲買人に「豊後牛は、大正十年の全国畜産博覧会で 1 等の首席に輝き、かつては『牛は豊後が日本一』といわれた歴史がある。いま大分県が誇るものに、しいたけがあるが、豊後牛も第二のしいたけにするために、県をあげて、増産と改良に取り組んでいる。東京市場には、今後、良い牛を定時、定量出荷するので、よろしくお願ひしたい⁽¹²⁾」と売り込んだ。関係者からは「県知事がセリ台に立ってあいさつしたのは東京市場開設以来、初めて⁽¹³⁾」と感激された。食肉市場の責任者から「3 年間通えば大分県の銘柄として確立する⁽¹⁴⁾」と言われ、平松知事は以後 3 年間食肉市場に通った。

1992(平成4)年10月には「和牛オリンピック」の第6回全国和牛能力共進会が大分県の湯布院町塚原高原で開かれた。県畜産協会から開催県になるよう働きかけを依頼された平松知事は全国和牛登録協会に掛け合ったが、当時の九州各県の飼育頭数は鹿児島28万頭・宮崎22万頭・熊本14万頭・大分7万頭で相手にしてくれなかった。しかし知事は、頭数で劣っても品質では劣らないと説得して遂に開催にこぎつけた。ここで県畜産試験場の「糸姫」が農林水産大臣賞を受賞するなど、県内出品牛全頭が上位入賞した。大分県では「豊後牛肉」の更なる品質向上を目指し、優秀な種雄牛の選抜試験を行っている。その努力の過程で、スーパー種牛「糸福」号の息子「寿恵福」号は2002(平成14)年7月に種雄牛としての能力評価試験で、BMSナンバー(霜降り牛肉ができやすい目安)で日本歴代2位になった。同年11月に岐阜県で開催された第8回全国和牛能力共進会では豊後牛は大活躍し、「枝肉の部」では「寿恵福」号の子供が内閣総理大臣賞(日本一)を得た。

例のBSE問題が契機となり、JA全農おおいたは豊後牛肉の生産履歴を証明する「豊後牛肉通行手形」の発行を2002(平成14)年4月1日から始めた。通行手形には、「出荷された豊後牛の名前」・「耳標番号」・「生産年月日」・「生産者の名前」・「与えた飼料」・「食肉処理を行った場所」・「BSE検査を行った機関」等が記載されている。偽ブランド牛肉横行の時代に「食の安全・安心」の観点から画期的な試みだと、今全国から注目されている。

鯛生金山を甦らせた中津江村

後にワールドカップのカメルーンキャンプで全国の注視を集めるようになる日田郡中津江村(現在は日田市)は一村一品運動が始まって、これというものがなかった。そこで斎藤隆一村長は、かつては東洋一を誇っていたが1972(昭和47)年の閉山後は「無用の長物」になっていた鯛生金山の廃坑に着目した。「金山を開発するなんて、一村一品じゃない⁽¹⁵⁾」との反対の声が大きかったが、「中津江村としては、これよりほかないんだ⁽¹⁶⁾」と説得した。鯛生鉱業株式会社所有の約70ヘクタールを、「博物館に生まれ変わらせて儲ける」とは言わず「後世に金山の歴史を残したい」とのみ言ってタダで払い下げてもらい、地底博物館・鯛生金山を1983(昭和58)年4月に開館した。「計上した予算は9億円。村の財政の1年分⁽¹⁷⁾」であった。観光客など来るはずがないと反対する村民を、「もし、失敗したら、俺が首をくくる⁽¹⁸⁾」からと説得してである。

この時も平松知事が絶大な応援をした。実は松本清張の小説に『西海道談綺』という時代小説がある。全集で全3巻、文庫版で全4巻2,360頁の大長編小説である。その舞台が鯛生金山なのである。平松知事は松本清張が芥川賞を取った「在る『小倉日記』伝」以来の愛読者で、1981(昭和56)年に対談した折、『西海道談綺』のテレビドラマ化を頼んだ。テレビドラマ化が決まると、平松知事はヒロインには「女優も一村一品で⁽¹⁹⁾」と大分出身の古手川祐子売り込んだ。かくして地底博物館・鯛生金山開館半年後に、松平健・中村敦夫・丹波哲郎・古手川祐子らによる3時間ドラマ『西海道談綺』がフジテレビ系列で放映された。現在では博物館出口近くに『西海道談綺』のコーナーがあって、ドラマの写真などが飾られ、そこに見物客が来ると、松本清張肉声の解説が聴けるようになっている。博物館を出たところにある金山資料館には松本清張直筆の原稿も展示されている。博物館の開館式には、松本清張も喜んでテープカットに加わった。村民の心配は杞憂であった。開館3ヵ月後の7月には早々と10万人を突破し、1年で50万人を超えた。年間11万人で採算がとれる計画を大きく上回った。

このような体験を持っている中津江村が、ワールドカップのキャンプ誘致に動いても、何の不思議もない。中津江村はカメルーンキャンプより前に、偉大な挑戦に成功していたのである。

中津江村は合併前に坂本休村長が中心になり「中津江村地球財団」を創設し、現在は日田市から委託を受ける形で、地底博物館・鯛生金山やカメルーンチームがキャンプをした鯛生スポーツ

センターを管理運営している。地底博物館・鯛生金山は2007（平成19）年11月、経済産業省から近代化産業遺産に選定された。中津江村は今も元気に頑張っている。

アジア・アフリカ諸国に広がる一村一品運動

さて平松知事が退任して一村一品運動の灯は消えてしまったと誤解している人が少なくない。しかし一村一品運動は世界、特にアジア諸国からアフリカ諸国へと、その影響を急速に拡大しつつある。2008（平成20）年5月28 - 30日に横浜市のパシフィコ横浜で開催された第4回アフリカ開発会議（TICAD）の最終日に採択された「横浜宣言」では貧困対策としての「一村一品運動」の有効性が謳われ、具体的な「横浜行動計画」にはJETRO（日本貿易振興機構）による「一村一品運動」予算の拡大、JICA（国際協力機構）による一村一品運動を12カ国に拡大すること等が盛り込まれた。

一村一品運動は、最初は農村部の貧困解消対策に苦心していたアジア諸国が、個別に大分の一村一品運動に着目した。しかし小泉首相が一村一品運動に着目してからは、一村一品運動は今や日本の後発開発途上国（LDC）援助の切り札になったのである。JETROやJICAでは「オールジャパンでアフリカに一村一品運動を⁽²⁰⁾」を合言葉にしている。平松守彦理事長は「運動がここまで世界に広まるとは思わなかった⁽²¹⁾」と述懐している。大分に生まれた一村一品運動は、今や日本政府のLDC援助の最大のソフトウェアになっている。一村一品運動元祖の大分県人、これを誇らずして何を誇るのか。

3. 統合の文化としての大分トリニータ

大分初のスポーツクラブの誕生

1994（平成6）年春、大分で初めてプロを目指すスポーツクラブが誕生した。前年に発足したプロサッカーリーグJリーグ入りを目指した大分フットボールクラブ（FC）である。チーム名は、県民・企業・行政が三位一体となって支える意味を込めて「大分トリニティ」と名付けられた。中心となったのは、当時自治省（現、総務省）から大分県に出向中の溝畑宏財政課長（前文化振興室長）であった。彼は、大分で県民が一つになって自慢できるものがサッカーのクラブチームと考えた。

Jリーグは、ヨーロッパ型の地域密着のクラブチームを目指し、チーム名は都市名と愛称だけに限定した。企業の名称は絶対に認めなかった。ここが企業名をチーム名とするプロ野球と大きく違うところである。あくまで、地域にこだわったところにJリーグの矜持がある。とは言え、Jリーグのチームは、企業チームを母体に生まれた。しかし、大分では、母体となる企業チームはなかった。溝畑氏は、新たにクラブを立ち上げることを決意する。母体となるチームはない、資金のあてもない、専用グラウンドもない、選手もいない、周りの意見は大半が否定的、支援する人もほとんどいない、まさにゼロからのスタートであった。

トリニティのJFL昇格とW杯大分開催決定

折しも、2002（平成14）年のサッカーワールドカップ（W杯）を日本に招致しようという活動が、（財）日本サッカー協会（JFA）を中心に始まっていた。溝畑氏は、W杯を大分で開催することによって、県民のシンボルとなりうるチームを育てようと考えた。こうして、地元のクラブチームの育成とW杯の開催は車の両輪として動き始める。

トリニティは、サンフレッチェ広島ムンジョンスクの今西和男監督（のち、総監督）からチームの指導を受けた。今西氏の韓国サッカー界との太い人脈が、大分の新しいチーム作りに活かされた。その結果、監督と主力選手を韓国人が担うことになる。プロ契約の文正植監督と韓国人選手2名のほ

か、セレクションで獲得した選手は、地元企業に採用を依頼し、アマチュア選手としてスタートした。1年目は「大分県サッカーリーグ1部」に参戦し、全勝・無失点でリーグ優勝を飾った。翌年1月には、九州各県リーグ決勝大会に駒を進め、ここでも勝ち上がり九州リーグ昇格を決めた。この間、活動資金は、溝畑氏が地元企業を1社ずつ訪問し夢を語り協力を依頼して確保した。その結果、1994(平成6)年は協賛企業70社、予算6,000万円で運営を行うことができた。翌年のシーズンは、九州リーグで優勝した。次は、全国地域リーグ決勝大会である。クラブの運営も徐々に軌道に乗り、協賛企業も150社に増え、年間予算も1億5,000万円にまで伸びた。

決勝大会を勝ち抜けば、JFL(日本リーグ)に昇格する。翌1996(平成8)年1月の大会に向けて、チームは強化に動く。ここでも韓国ルートが威力を発揮する。元韓国代表主将の李泳眞、同じく代表の皇甫官を招聘した。彼らは韓国の英雄である。Jリーグならいざ知らず、まだ地域リーグの段階のチームに参加することは奇跡に近い。それには、文監督に加え、韓国サッカー界に広い人脈を持つ朴景浩顧問(のち、強化部顧問)の力が大きく寄与した。人脈の力を見せつけられた思いがする。彼らの力は、やはり絶大であった。1996(平成8)年1月に7,000人を超えるサポーターが応援する中、大分市営陸上競技場(大分市営)で行われた大会を勝ち抜き、わずか2年でJFL昇格を実現した。クラブ設立661日のことである。史上最短のスピードであった。そして、この年、2002W杯は、日本と韓国の共同開催と決まり、大分県も国内開催地10カ所の一つに選ばれた。監督と主力選手を韓国人が担う大分トリニティは、まさに日韓共催の申し子と言えた。

JFL参戦と最初の試練

1996(平成8)年のJFL1年目は、勝利で始まった。ホーム初戦も快勝し、3,259人の観客の期待に応えた。ホームの中心は大分市営。他に、条件を満たした佐伯市営陸上競技場を使用することも度々であった。場合によっては、設備は不十分ながら別府市の野口原グランドを使うこともあった。運営では、チケットの販売やもぎり、試合が終わった後の観客席周辺のゴミ拾い、選手や審判の入退場時の警備、メディアへの対応などには、様々な業種の人たちがボランティアで参加していた。その中から、毎試合欠かさず参加して運営を支えてくれた人も現れてきた。20歳代の若い人たちはばかりではない。40・50歳代のボランティアも活躍した。彼らは、トリニティの試合で経験を積み、その後W杯の中心となって活躍した。チームに合わせて、ボランティアも成長していった。

JFL1年目は、13勝17敗の10位でシーズンを終えた。2年目となる翌1997(平成9)年は、最初の大きな挫折を味わった年でもあった。メインスポンサーが、開幕直後に表面化した業績悪化のため、トリニティへの支援ができなくなった。経営上大きな痛手となり、チームの士気も下がり、成績もふるわず、文監督を引き継いだ朴景和監督はシーズン途中で退団に追い込まれた。最終結果は、11勝19敗の12位に低迷した。成績不振は、入場者の減少も招き、チームは存亡の危機を迎えた。このような厳しい状況のなか、多額の借入金により、ブラジルから新たに経験豊かなフォルミーガ監督を招くとともに、ブラジル選手2名を加えてチームの大幅な変革を図った。その結果、翌1998(平成10)年は成績も向上し、入場者数も増え、県民の期待や関心も高まってきた。

(株)大分フットボールクラブの誕生

第1の危機をブラジルシフトで乗り切ったチームは、JFLとしての最後となるシーズンを16勝14敗の16チーム中の6位で終えた。翌1999(平成11)年のシーズンからJリーグが1部と2部に分かれることに伴い、トリニティはJ2への加入を目指した。J2では、経営の安定と責任を明確化するため、クラブの法人化が求められた。この時点まで、トリニティを運営する大分FC

は、600社にまで膨れ上がった企業の協賛により運営されてはいたものの、組織としては任意団体のままであった。そこで、新たに法人化し、(株)大分 FC として生まれ変わるようになった。

経営権とともに大分 FC の借入金も引き継ぐことになった(株)大分 FC は、当初から3億円の負債を抱えて1999(平成11)年1月スタートした。前年に神奈川県に本拠を置く住宅リフォーム会社が大口スポンサーとして名乗りをあげたことが法人化への大きな力となった。チーム名も「大分トリニータ」に変更された。「トリニティ」という言葉が、既に様々な分野で商標登録されていたからであった。トリニータは、「トリニティ」と「おおいた」を組み合わせた造語で、当時の平松守彦知事の発案であった。こうして、J2 チーム大分トリニータが正式に発足した。クラブ創立6年目の春であった。

「秋天の陽炎」

J2 初年、3月14日にホーム(大分市営)で行われたコンサドーレ札幌との開幕戦を勝利でスタートしたトリニータは、その後も上位につけ、11月21日の最終戦を勝てばJ1に自動的に昇格できるところまで来た。この日のことは、金子達仁著『秋天の陽炎』(文藝春秋)によってみよう。

最終節の相手は、モンテディオ山形。石崎監督が前年まで指揮をとっていたチームである。午後1時キックオフの笛が鳴った。「陽炎でも立ちのぼりそうな、暑い秋の一日が始まった」のである。公式入場者数は、1万5,702人。通路や階段にまで人があふれ、トイレに立つのすらままならない状況であり、実際の観客はもっと多かったと思われる。しかもそのほとんどがトリニータのJ1昇格の場に立ち会いたいというトリニータファンであった。

試合は「退屈な膠着状態に陥」ったまま、前半を終了した。後半13分、トリニータが先制。1-0。このまま終われば、昇格が決定する。ロスタイムに入り、「宴の準備」が始まろうとしていた。ベンチの選手は総立ちとなり、VIP席では、チームを草創期から支えてきた平松知事が昇格のインタビューを受けようとしていた。まさにその時、山形のフリーキックがゴールに吸い込まれていった。ロスタイムの失点。アメリカW杯への出場権を失った、あのドーハの悲劇と同じである。「恐ろしいほどの沈黙」が、トリニータのサポーターであふれたスタンドを覆った。目の前にまできた「J1昇格の夢は、秋の空に消え」ていった。

翌2000(平成12)年のシーズンは、昇格候補と期待され最終節までもつれたものの、結局昇格を逃した。続く2001(平成13)年は、W杯会場となるビッグアイも完成した。実質的な柿落としは、5月26日のJ2第14節。2万9,226人も観客が祝祭に立ち会った。試合は、トリニータが新鋭ストライカー高松大樹のビッグアイ初ゴールなどにより、3-1で当時首位を走る京都に快勝した。3度目の正直を狙ったこの年も結果は6位に留まった。大分の地に「陽炎」が立ちのぼるのは、W杯の開催を待たなければならなかった。

そして、大分は2002(平成14)年6月10日のチュニジア対ベルギー戦、13日のメキシコ対イタリア戦、16日のスウェーデン対セネガル戦を見事に開催した。チュニジア対ベルギー戦に訪れたあるベルギー人の「大分のもてなしは素晴らしいよ。ちょっと良すぎるくらい⁽²²⁾」という感想やセネガル対スウェーデン戦に来県したスウェーデン人の学生が大分の親切さに感動して、その後改めてインターンシップのために来県した話など、おもてなしに関する話題には事欠かない。こうして、大分は夢のようなW杯の一週間を過ごした。

4度目の正直とJ1の厚い壁

W杯の興奮がまだ余韻として県民の心の中に残っている2002(平成14)年11月2日、トリニータは埼玉県大宮公園サッカー場で行われた対大宮アルディージャ戦を1-0で完封勝ちし、J1昇格を決めた。「秋天の陽炎」から4年目の秋である。前年シーズン途中で就任した小林伸二監

督は、「選手、スタッフ、観客が全員で勝ち取った昇格⁽²³⁾」と喜びを語った。トリニータは、遂に国内最高のステージに立った。W杯の開催とJ1昇格、車の両輪として走ってきたことがW杯開催の年に一つの到達点に達した。翌2003(平成15)年1月の県民意識調査では、J1昇格について、52.8%の人が「誇りに思う」、20.1%が「子どもに夢を与えた」=複数回答=と回答したほか、「対戦チームによっては観戦したい」「全部の試合に行きたい」など、84.7%がスタジアムに足を運びたいと答えている⁽²⁴⁾。

J1元年のトリニータは、3月23日にJ2時代のライバル、ベガルタ仙台とアウェーで戦うことから始まった。結果は0-1の惜敗であった。J1初勝利は、第3節、ホームのビッグアイで実現する。高松のJ1リーグ初ゴールなどでガンバ大阪を3-2で撃破した。そして、7月13日、ジュビロ磐田との試合では、3万4,823人の観客を集め、今もって破られていないホーム観客動員の最高を記録した。11月29日最終節、負ければJ2降格という瀬戸際のなか、3万人を超えるサポーターの後押しを得て、残留争いのベガルタ仙台を破り、最低限の目標であるJ1残留を果たした。

2年目のシーズンに先立つ県民意識調査では、J1の効果について、「ビッグアイの有効活用」が46.7%、「大分県のイメージアップ」が45.3%と答えた。今年観戦したい人は75.4%にとどまり、前年に比べ10ポイント近く下がった。2003(平成15)年にホームで1勝しかできなかったこともあり、観客が増える条件に「とにかく勝つこと」を46.8%の人があげた⁽²⁵⁾。こうした強いトリニータを見たいという期待に応えるべく、オランダからハン・ベルガー氏を招聘し、オランダ流の攻撃サッカーを目指した。

補強の強化や若手の台頭で期待された2004(平成16)年シーズンも終わってみれば、13位に留まった。J1の壁は厚かった。続く、2005(平成17)年は、草創期からのシンボルでもある皇南^{ファンボ}官^{カン}氏が満を持して監督に就任した。トリニティ時代からのサポーターにとって、輝ける期待の星であった。しかし、サッカーの女神は、この年皇南^{ファンボ}官^{カン}監督に微笑むことはなかった。

シャムスカマジック

2005(平成17)年3月5日、ホーム・ビッグアイで開幕したリーグ戦を1-2の黒星でスタートした。厳しい序盤の戦いは、その後も続き、8月27日勝点で最下位に並んだ。その日の深夜、成績不振の責任をとって、皇南^{ファンボ}氏は監督を辞した。クラブ初の生え抜き監督の挑戦が終わった。急遽ブラジルから招聘した新進気鋭の指導者シャムスカ氏(40歳)を監督に迎え、トリニータは再出発した。結果は、残り12試合を7勝2敗3引分で終え、自動降格圏の17位から11位にまで順位を上げた。人呼んで、「シャムスカマジック」という。年末に放映されたOBSテレビ「回顧おおいた2005」では、心に残ったニュースの第2位にトリニータがランクされた。シャムスカマジックが、県民にいかに大きな印象を与えたかが分かる。

翌2006(平成18)年は、シャムスカ監督が一年を通して指揮を執り、18チーム中8位と、J1昇格後最高の順位を記録した。高松・西川・梅崎といった生え抜き選手の活躍がチームの好成績につながった。彼らは、日本代表に初めて選出され、チームに新しい歴史を刻んだ。彼らの才能をうまく引き出し、J1クラブのなかで年間運営費が最下位クラスの、いわば弱小チームにあって、中位以上の成績を引き出したシャムスカ監督の手腕は高く評価された。続く2007(平成19)年は、一転して厳しいシーズンとなり、14位で漸く残留を決めた。シャムスカ監督にとって初めての苦しいシーズンとなった。その苦しさをバネにシャムスカ・トリニータは、翌年大きく飛躍する。

2008(平成20)年のシーズンは、北京オリンピックに日本代表として出場した西川・森重を中心とした鉄壁な守備、エジミウソン・ホベルトのブラジルコンビによる中盤の活躍により、最終

的にはシーズン最少失点のリーグ記録を更新し、16勝10敗8引分の4位と過去最高の成績を残した。J1昇格以後、毎年のように残留争いに一喜一憂したチームが嘘のようである。さらに、ナビスコ杯でも、グループリーグを始めて突破すると、名古屋との準決勝を勝ち抜き、決勝では清水エスパルスを2 - 0で下し、初の日本一に輝いた。溝畑社長は、「サッカーでは草サッカーからでもJリーグのトップになれる。みんなのおかげでここまで来た⁽²⁶⁾」と選手とともに喜びを爆発させた。Jリーグ経営諮問委員会武藤委員長の言う「小規模予算でもマネジメントが良ければ、強豪に勝つことができるのがサッカー⁽²⁷⁾」を実践した姿がここにある。

綱渡りのクラブ経営

大分トリニータは、県民・企業・行政が三位一体で支える県民チームとして生まれ、育ってきた。県民は、観客として試合会場で応援する、ボランティアとして試合を支える、企業はスポンサーとしてクラブをサポートする、行政はスタジアムや練習場などの環境整備でチームを支える、これが三位一体の役割分担である。平均的なJ1クラブは、収入の約48%がスポンサー収入で支えられている。入場料収入は21%程度である。㈱大分FCのスポンサー収入は、約53%と平均よりやや比率が高い。入場料収入も27%と平均以上に健闘している。母体となる大手企業がない㈱大分FCは、広く薄く企業・団体からの協賛に頼っており、J1昇格以降、その数は800社を超えている。また、大口スポンサーも、新興のベンチャー企業に頼らざるをえないため、スポンサーの企業業績がストレートにクラブのスポンサー収入に影響し、クラブの経営は設立以来不安定な状況が続いてきた。

2004(平成16)年になってメインスポンサーの住宅リフォーム会社が経営危機に陥り、クラブは大口のスポンサー収入を失うことになる。そのため、6月には、経営基盤を強化するため、地場企業の再生を支援する大分企業支援ファンドからの支援を受ける一方、入場料やグッズ収入のアップにも努めたほか、新たなスポンサーの獲得により急場を乗り切ることができた。この間、8月の取締役会で溝畑宏取締役(非常勤、大分県参事)が、県を退職して新しい社長に就任した。

その後も、スポンサー収入の確保では綱渡りの状況が続き、溝畑社長の東奔西走の結果、2005(平成17)年6月になって漸くパチンコ店経営企業がメインスポンサーに名乗りをあげた。しかし、それまでのつけは大きく、遂に株主総会で経営危機が表面化した。累積赤字は7億円を超えた。外部の有識者からなる経営諮問委員会が、経営改革や情報開示の徹底を条件に、緊急支援を県に要請した。サポーターも立ち上がり、観客増を県民に広く呼びかけた。市民後援会長の坂本休元中津江村長は「(トリニータは)大分の活力源であり、子供たちの希望。今こそ、県民、企業、行政の三者が支えるべき⁽²⁸⁾」と訴えた。

こうした動きに、広瀬勝貞知事は9月、トリニータの活躍が大分県の元気の源となっていることなどを理由に公的支援を決断した。当座の経営破綻は免れた。さらに、メインスポンサーによるシーズンシートの大量購入、コスト削減の徹底により当面の危機は回避された。その後も、経営のスリム化を進めた結果、2006(平成18)年はJ1リーグ平均を大きく下回る18億円と、18クラブ中15番目の経費で運営した。その結果、2006(平成18)・2007(平成19)年度の2季連続で純利益を上げ、累積債務もピーク時に比べ半減した。県内企業からのスポンサー収入の確保など、まだ課題は残るものの経営の危機は脱することができた。

大分を統合する文化となったトリニータ

大分トリニータのホーム観客数は、J2時代の1999(平成11)・2000(平成12)年の2年間こそ、リーグ平均を下回っているが、W杯の会場となるビッグアイが完成し、トリニータのホームとして利用できるようになった2001(平成13)年からは、ずっとリーグ平均を上回っている。とりわけ、J1昇格を決めた2002(平成14)年は、W杯が開催され、大分でサッカーに対する県民の

関心が極めて高まったこともあり、ホーム観客数は激増した。翌年のJ1昇格後は、年ごとに多少の変動はあるものの、一貫して2万人前後の観客が九州石油ドームを埋めている。

3月から11月まで、ホームで試合のある週末の夕方もしくは午後のひととき、自分の意志で、自分でお金を払って集まってくる人たちである。トリニータカラーの青いシャツを着た人も多い。若い人たちばかりではない。中高年の人たちもやってくる。カップルばかりでなく家族連れも多い。おじいちゃん・おばあちゃんがお孫さんと一緒にの姿もかなり目立つ。始めからサッカーが好きな人たちばかりではない。ただ、誰もが、週末の2時間程度、トリニータを応援することで「おおいた」を共有する時間を愉しんでいる。

ホームだけではない。アウェーの首都圏や関西圏でも「おおいた」を共有することができる。J1リーグの上位で活躍している今年2008(平成20)年は、多くの大分県人がトリニータを応援しながら「おおいた」を感じているに違いない。11月1日のナビスコ杯決勝には、大分から1万人を超えるサポーターがサッカーの聖地・国立競技場に駆け付けた。首都圏の大分出身者も加わり、4万5千人の観客で埋め尽くされたスタジアムの半分近くをトリニータブルーで染めた。全国の大分県人が一つになった瞬間である。トリニータは、まさに大分を一つにする統合の文化となった。

[註]

- (1) 筑紫哲也「まとまりの悪さは『天下一品』」『THE21 大分から21世紀が見える』1996年3月特別号66頁。
筑紫哲也氏のエッセイはタイトルからして「まとまりの悪さ『天下一品』」である。もちろん文中にも、同じ表現がある。
- (2) 平松守彦『地方からの発想』(岩波書店)19頁。
- (3)・(4) 同上31頁。
- (5) 同上29頁。
- (6) 同上42頁。
- (7) アドバンス大分『おおやま独立国』(アドバンス大分)42頁。
- (8) 平松・前掲書20頁。
- (9) 本山友彦『西太一郎聞書 グッド・スピリッツ 「いいちこ」と歩む』(西日本新聞社)153頁。
- (10) 同上140頁。
- (11) 内田和美「生消連携し高付加価値化図る『食』の流通」『フードアイランド九州 2004年版九州経済白書』(財団法人九州経済調査会)67頁。
- (12)・(13) 平松守彦『一村一品のすすめ』(ぎょうせい)130頁。
- (14) 平松守彦『地方からの発想』34頁。
- (15) 大森彌『一村一品運動20年の記録』(大分県一村一品21推進協議会)158頁。
- (16)・(17) 同上159頁。
- (18) 平松守彦『地方からの発想』68頁。
- (19) 平松守彦『わたしの地域おこし』(NHK出版)114頁。
- (20) 山本愛一郎・村橋靖之「オールジャパンでアフリカに一村一品運動を」『monthly Jica』2007年2月号。
- (21) 「大分の『一村一品』展示 横浜市アフリカ開発会議で」『大分合同新聞』2008年5月29日付け朝刊。
- (22) 有元健「ローカルなものの回復とコスモポリタンな経験」黄順姫編『W杯サッカーの熱狂と遺産』(世界思想社)33頁。
- (23) 「みんなで勝ち取った」『大分合同新聞』2002年11月3日付け朝刊。

- (24)「トリニータ 県民の誇り」『大分合同新聞』2003年1月18日付け朝刊。
- (25)「強いトリニータ見たい」『大分合同新聞』2004年4月7日付け朝刊。
- (26)「夢の頂」『大分合同新聞』2008年11月2日付け朝刊。
- (27)「強豪と堂々渡り合う」『大分合同新聞』2006年12月22日付け朝刊。
- (28)「サポーターも心配」『大分合同新聞』2005年9月2日付け朝刊。